

ちょっと ブレイクしませんか？

第 2 回

亀と兎

イソップ物語に「亀と兎」という小話がある。

「亀と兎が足の速さのことで言い争い、勝負の日時と場所を決めて別れた。さて、兎は生まれつき足が速いので、真剣に走らず、道から離れて眠りこんだが、亀は自分の遅いを知っているのに、弛まず走り続け、兎が横になっている所も通り過ぎて、勝利のゴールに到達した」

皆さんよくご存知のイソップの代表的な人生訓だ。

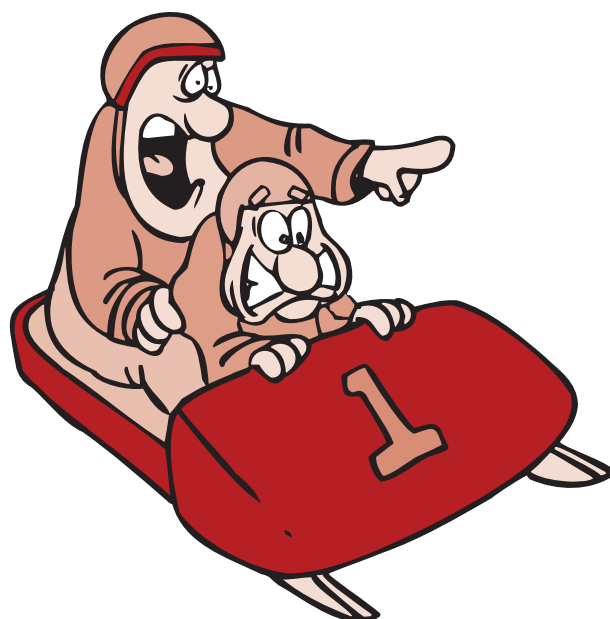
素質も磨かなければ、努力に負けてしまうことが多い。白熱電灯の発明以来、蓄音機や自動車など電気製品の発明王エジソンでさえ、「天才は1%のインスピレーションと99%の発汗である」と語っている。才能があっても努力を怠っては伸びない。才能がなくて努力もしないと救いようがない。なかなか示唆に富む話である。

精神医学的に見ると、兎は己の才能に自惚れていて、鈍足の亀を馬鹿にしている自己愛型＝プライド人間、亀は己の才能のなさを認識し、自己評価は高くないがマイペースで努力を重ねるコツコツ型人間だ。

今回紹介するのは「クール・ランニング」。ジャマイカのボブスレーチームを描いた作品。ジャマイカといえば、レゲエで知られる常夏の島国。氷上のボブスレーとは縁もゆかりもないが、実際に1988年のカルガリー冬季五輪に初出場し、続くリレハンメル冬季五輪では、14位に食い込んで話題を呼んだ。陸上の短距離選手だったデリースは、五輪選考会で本命視されながら、隣コースの選手ジュニアの転倒に巻き込まれ、夢を絶たれる。でも、脚力が要求されるボブスレーに目をつける。チームに集まったのは、デリースな親友のサンカ、陸上のライバルだったコル、そして転倒事故で二人の五輪出場の夢を絶ったジュニア。素人ばかりだが、猛特訓を繰り返しレーサーらしく成長してゆく。

厳寒のカルガリーでは、強豪国の選手たちから冷笑を浴び、成績も散々だったが、「強豪のまねじゃなくて、自分たちの流儀でやろうぜ」と開き直り、好成績で予選を突破。チームが得たものは、メダルよりもはるかに大きな「誇り」でした。

困難をさらりと受け止め、陽気に挑戦していく若者たちの姿が、元気を与えてくれる清々しい後味の作品だ。ちなみに、ジャマイカの自殺率は人口十万あたり0.3で、日本の80分の1。底抜けの楽天性と不屈のチャレンジ精神は私たちに欠けている大切なものを教えている。秋の夜長の週末にでも「クールランニング」を見てスカッとしてみませんか。



精神科医・映画評論家

かゆ かや ゆう へい
粥川 裕平

国立大学法人名古屋工業大学
保健センター長
大学院産業戦略工学専攻教授